凡そ「佛教の戒壇」なるものは、原則として精神的一大權威を有せねばならぬものである、何となれば正式の戒壇なるものは、個人的や團體的や地方的の性質のものでなくして國家的世界的の性質のものであるからである。故に其の建立の次第も一地方の知事や市長や乃至當局の許可を受けて建つべきものでなくして、實に一天萬乘の天皇の勅宣の下に立てらるべきものである、又其の時は王佛冥合の時として宗教と政治とが一體になつた場合であらねばならぬ。而して今「本門の戒壇」は最勝のものであるから、其の場所は天下中にて最勝の地を選定せねばならず、又其の授戒さるべき相手は日本乃至全世界の國王及び國民の全體で、其の内容は合掌以敬心、以て懺悔滅罪すべき一大聖場であるのである。而してこの本門戒壇の實現は固より將來に屬するものであり、時運の到るを待たねばならぬ性質のものである。故に大聖人も唯豫言だけを垂れて置かれた許りである。即ち『三大祕法抄』の一節に、

戒壇とは王法佛法に冥し佛法王法に合して、王民一同に本門の三大祕密の法を

持つて、有德王・覺德比丘の其の往を、末法濁惡の未來に移さん時、勅宣並に御敎書を申下して、靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべきものが、時を待つべきのみ、事の戒法と申すは是なり。三國並に一閻浮提の人懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王・帝釋等も來下して蹋み給ふべき戒壇也。

等と宣へるは是れである。然るに此の王佛冥合即ち法國冥合の時を待つて始めて建立せらるべき戒壇は固より正式の戒壇であつて、これを「事の戒壇」と稱するものである、この正式の事の戒壇は將來を期すべきものであるが、それまでは戒壇の義は全くないかといふにさうではない、それは此の事の戒壇に對して「理の戒壇」なるものがある。これに又數義がある、若し本尊その物についていはゞ本尊の立たせたまふ佛壇・佛殿が即ち戒壇ともいへる。若し信者行者についていはゞ、法華經の信者行者の信心の道場は、寺院敎會は勿論、樹の下、石の上、何れの場所も、皆一分々々の戒壇であるともいへる、中に就いて一宗の總本山たる身延山久遠寺は理壇中の事壇であつて、彼の正式の大事壇が建立される曉まで

の假の事壇、準備的豫備的事壇として、精神界に大權威を有せねばならぬ。それに身延山は折角總本山といふ名實相伴ふ美稱あるに拘らず、「總とは尊稱の義にして總括の義にあらず」とわざと名實不相應の解釋を下し居るに至つては思はざるの甚しきである、願はくは身延をして當分の事の戒壇の權威あらしめてほしい若し夫れ所謂「頭の中の戒壇」といふが如きは信心を宿せる信者行者の內在的精神をいふのであれば、これは理壇中の理壇といふべきである。

戒壇否定論者の誤謬

然るに宗門の內外に一派の學者あり、我等が身を以て其の建立を一日も早めんと急ぎつゝある正式事壇の建立を以て非宗義なり空想なりとするものがある、これ甚だ非である、何となれば三國佛教史を繙いて「戒壇の歷史」を案ずるに、先づ「小乘の戒壇」は、印度に於ては、佛一時摩訶陀國に到り、弗迦沙王のために說法したまふた時、摸至菩薩の發起により、名にし負ふ祇園精舍の外院に於て建立せられてゐる、周の穆王十三年に當つてゐる。支那に於ては、曹魏の嘉平年間天竺僧の曇摩迦羅三藏、曇諦法師の二人によつて建立せられてゐる。日本に於ては、

三國佛教戒壇史

人皇四十六代孝謙天皇天平勝寶五年、唐僧鑑眞、勅によつて中國には奈良の東大寺と唐招提寺に二個所、關東には下野の藥師寺に一個所、關西には筑前の觀世音寺に一個所建てられてゐる、所謂四處の戒壇が、これである。次に「權大乘の戒壇」は支那唐の代宗皇帝永泰元年大興寺に勅して方等戒壇を建立せしめられてゐる。後に「實大乘法華迹門の戒壇」は、日本人皇第五十二代嵯峨天皇弘仁十年、傳敎大師叡山に圓頓大乘の戒壇を立てることを奏請せるに起り、傳敎の歿後、天長五年第一座主義眞の代に愈〻建立されてゐる。かくて時は僅に正像二千年の天地を支配し、國は狹く印度・支那・日本の三國に限られたる小乘・權大乘・迹門の佛敎に於てすらも、尙且つ幾多の戒壇が建立せられてゐることは、歷史上明白なる事實である、況んや時は末法萬年の天地を支配せんとし、國は廣く日本乃至全世界の王民を敎へ導かんとする、我が法華本門最勝の宗敎に於てをやである。過去を以て將來を推すに、本門戒壇建立の事は斷乎として疑ふべからざるところである若し夫れ『報恩抄』等の一節に三祕を並べ擧げたまふ塲合、本尊題目の二大祕法を

傳敎の法華圓頓戒壇

日蓮主義戒壇論の主張

説明して、この戒壇の一大祕法は唯名のみ擧げたまふは、或者の言ふが如く、決して事の戒壇否定の聖意でなく、事將來に屬するが故である。然れども全然不言に終るべきものでないから、弘安四年『三大祕法抄』に、殆ど御遺言の如くに、その要領のみを略説したまふたのである。但『三大祕法抄』を僞書とするが如きは、未だ嘗て確固たる理由を見聞しない、此の書は『錄外』に屬すといつても、錄外中にも僞書は甚だ多くはない、御眞蹟が傳はらぬから、其の眞書たることも容易に證明しがたいといつても、一宗古今の諸師も多くは之を眞書と信じた、豈に一二の輩の否定説を俄に信じて、此の要書を棄てることが出來ようか、我等は飽く迄この書の眞書なることを信じ、此の書を根據として、一層「日蓮主義戒壇論」を主張せんとするものである。而して我等は此の書の豫言をして、一日も早く實際に光顯せしむべく、大に努力奮勵せんとするものである。

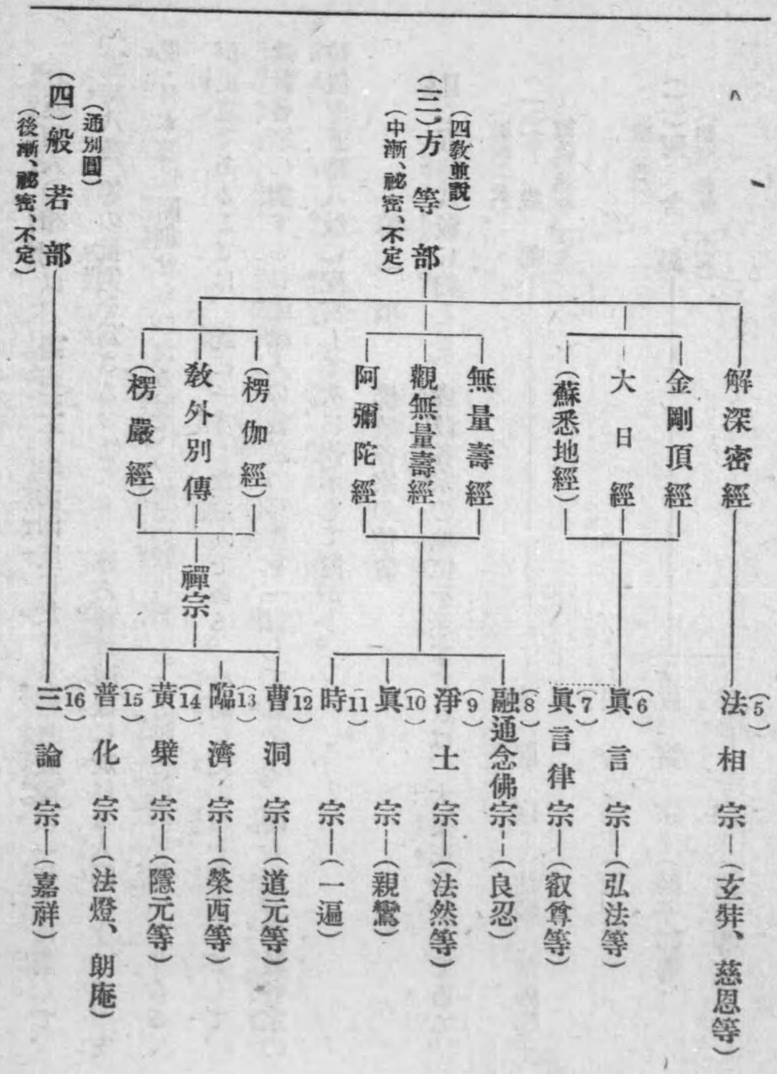
第四節　佛教各宗を評す

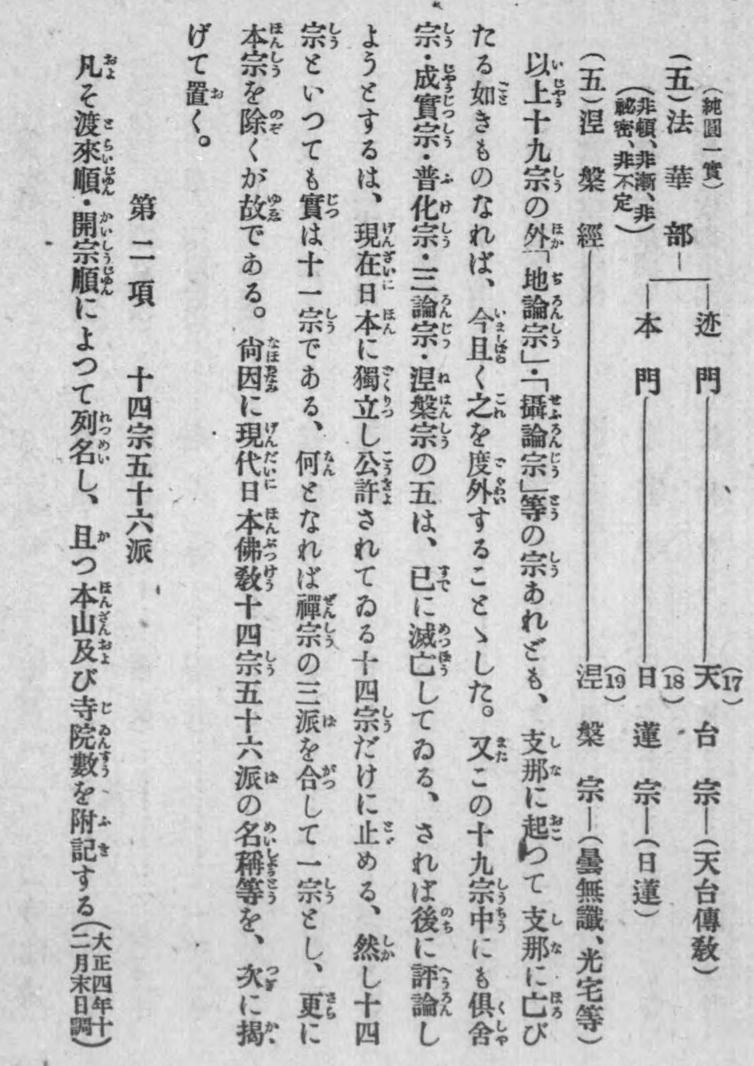
日蓮聖人の相判は、過去三千年前印度に於ける釋尊直説の一切經に對して、「五時八教」等の批判を爲さるゝよりも、寧ろ釋尊滅後に於ける人師によつて、支那・日本等に開創せられたる現代の活宗教に對して、嚴正批判を加へさせらるゝが正意であることは、既に一言した通りである。今將に此の章を畢らうとして、佛教各宗に對する日蓮聖人の教義の態度を一言して置かう。而も先づ佛教各宗の位置を五時八教に配當して次に掲示して置かう。

第一項　佛教各宗の位置

且く五時八教に約して、佛教各宗の地位を示すときは、大要左の如きである。

- (別圓二教)
  - (一)華　嚴　部
    - (1)華　嚴　宗—(法藏、澄觀等)
- (頓教、祕密、不定)
- (藏　教)
  - (二)阿　含　部
    - (2)倶　舍　宗—(天親等)
    - (3)成　實　宗—(師子鎧等)
    - (4)律　宗—(道宣等)





以上十九宗の外「地論宗」・「攝論宗」等の宗あれども、支那に起つて支那に亡びたる如きものなれば、今且く之を度外することゝした。又この十九宗中にも俱舍宗・成實宗・普化宗・三論宗・涅槃宗の五は、已に滅亡してゐる、されば後に評論しようとするは、現在日本に獨立し公許されてゐる十四宗だけに止める、然し十四宗といつても實は十一宗である、何となれば禪宗の三派を合して一宗とし、更に本宗を除くが故である。尙因に現代日本佛敎十四宗五十六派の名稱等を、次に掲げて置く。

第二項　十四宗五十六派

凡そ渡來順・開宗順によつて列名し、且つ本山及び寺院數を附記する（大正四年十二月末日調）

〔宗名〕	〔本山〕	〔寺院數〕
(一)法相宗(無派)	興福寺(奈良)	四三寺
(二)律宗(無派)	唐招提寺(奈良)	二三寺
(三)華嚴宗(無派)	東大寺(奈良)	三二寺
(四)天台宗(三派)		四五六三寺
(1)天台宗	延曆寺(近江)	三四九二寺
(2)天台宗寺門派	園城寺(近江)	六四六寺
(3)天台宗眞盛派	西敎寺(近江)	四二五寺
(五)眞言宗(十派)		一二二三九寺
(1)眞言宗高野派	金剛峯寺(紀伊)	二七二四寺
(2)眞言宗東寺派	敎王護國寺(京都)	一八一寺
(3)眞言宗泉涌寺派	泉涌寺(京都)	三九寺
(4)眞言宗御室派	仁和寺(御室)	一四一三寺

(5)眞言宗大覺寺派	大覺寺(嵯峨)	五九九寺
(6)眞言宗醍醐派	醍醐寺(宇治)	一三六八寺
(7)眞言宗山階派	勸修寺(宇治)	一五七寺
(8)眞言宗小野派	隨心院(宇治)	三〇寺
(9)新義眞言宗豐山派	長谷寺(大和)	二九一五寺
(10)新義眞言宗智山派	智積院(京都)	二八一三寺
(六)眞言律宗	西大寺(奈良)	六九寺
(七)融通念佛宗(無派)	大念佛寺(大阪)	三六一寺
(八)淨土宗(二派)		八三五〇寺
(1)淨土宗	知恩院(京都)	七一九八寺
(2)淨土宗西山派	光明寺等(鎌倉)	一一五二寺
(九)臨濟宗(十四派)		六〇七八寺
(1)相國寺派	相國寺(京都)	一一一寺

(2)建仁寺派……建仁寺……(京都)……七四寺
(3)南禪寺派……南禪寺……(京都)……四五〇寺
(4)大德寺派……大德寺……(京都)……二一二寺
(5)東福寺派……東福寺……(伏見)……四二一寺
(6)妙心寺派……妙心寺……(花園)……三五五〇寺
(7)天龍寺派……天龍寺……(嵯峨)……一一三寺
(8)圓覺寺派……圓覺寺……(鎌倉)……二一三寺
(9)建長寺派……建長寺……(鎌倉)……四六〇寺
(10)向嶽寺派……向嶽寺……(山梨)……六七寺
(11)方廣寺派……方廣寺……(靜岡)……一九七寺
(12)國泰寺派……國泰寺……(富山)……二六寺
(13)永源寺派……永源寺……(近江)……一三六寺
(14)佛通寺派……佛通寺……(德島)……四八寺

(十)曹洞宗(無派)……總持寺……(越前見)……一四二二五寺

(十一)眞宗(十派)……一九六三六寺
(1)眞宗本願寺派……(西)本願寺……(京都)……九七一三寺
(2)眞宗大谷派……東本願寺……(京都)……八四八一寺
(3)眞宗高田派……專修寺……(尾張)……六三三寺
(4)眞宗佛光寺派……佛光寺……(京都)……三三二寺
(5)眞宗興正寺派……興正寺……(京都)……二八五寺
(6)眞宗木邊派……錦織寺……(近江)……五五寺
(7)眞宗出雲寺派……毫攝寺……(越前)……四八寺
(8)眞宗山元派……證誠寺……(越前)……一一寺
(9)眞宗誠照寺派……誠照寺……(越前)……四四寺
(10)眞宗三門徒派……專照寺……(越前)……三四寺

(十二)日蓮宗(九派)……五〇一八寺

(1)日　蓮　宗……久　遠　寺……(甲　斐)……三七〇一寺
(2)日蓮正宗……大　石　寺……(駿　河)……七〇寺
(3)本　門　宗……本　門　寺……(駿　河)……二一九寺
(4)法　華　宗……本　成　寺……(越　後)……一六五寺
(5)顯本法華宗……妙　滿　寺……(京　都)……四四四寺
(6)本門法華宗……本能寺等……(京　都)……三三三寺
(7)本妙法華宗……本　隆　寺……(京　都)……八二寺
(8)不受不施派……妙　覺　寺……(備　前)……三寺
(9)不受不施講門派……本　覺　寺……(備　前)……一寺
(十三)時　宗(無派)……清淨光寺……(藤　澤)……四九五寺
(十四)黄　檗　宗(無派)……萬　福　寺……(宇　治)……五二五寺
△此の外に一寺にして二以上の宗派に屬するもの四十九個寺あり
寺院總數……七萬一千七百二個寺

僧侶總數……十六萬二千九百四十六人
〔內譯〕住　職……五萬一千五百八十四人
教　師……六萬六千六百七人
非教師……四萬四千七百五十五人

第三項　律　宗

「律宗」は經律論の三藏の內、專ら律藏によつて立てられたる宗門である。律卽ち戒律は、釋尊の宗教の道德的方面であるが、釋尊の滅後第一結集に於て十大弟子の一人なる優婆離尊者が、之を八十番に誦出し結集したものを八十誦律と名くるので、之が此の宗の根本聖典である。其の後迦葉・阿難・末田地・商那和修・優婆麁多の五師(異世の五師)之を順次に傳へ、佛滅後百年に至つて曇無德部(四分律)、薩婆多部(十誦律)、迦葉遺部(解脫律)、彌沙塞部(五分律)、婆麤富留部(僧祇律)の五部(同世の五師)に分れた、其の中曇無德部卽ち四分律が最も盛大であつた。支那へは魏の代に印度僧曇摩訶羅及び曇諦の二人が始めて四分律の一分を傳へ、後五百五十年を經て姚秦の代に

鳩摩羅什十誦律を譯し、佛陀耶舍四分律を譯し、又諸種の律書が行はれた。北魏の孝文帝以後、法聰・道覆・慧光・道雲・道洪・智首等相尋で承け繼いだ。唐に入つて四分律宗三派に分れ、終南山の道宣は南山宗を、法礪は相部宗を、懷素は東塔宗を開き、其の中南山律最も行はれたのである。我が國へは天武天皇の時、道光が入唐して之を傳へ、聖武天皇の天平七年に道璿が來朝して再び之を將來り、同帝の天平勝寶六年鑑眞（道宣の弟子の弘景の門下）が三度之を傳へた。之より本宗大に榮え、勅して天下の三戒壇を設け、又唐招提寺を建てた。其の後甚だ頽廢したが、實範・覺盛・叡尊（日蓮聖人時代に聖人に反抗した極楽寺良觀の師）等大に本宗を興し、泉涌寺の俊芿又入宗傳持して京都に之を弘めた、之を前者の南都律に對して北京律といつた。享和年中慈雲出でゝ正法律を唱へしより、眞言律盛となり、明治二十八年「眞言律宗」の獨立を見るに至つた。同三十三年更に單稱「律宗」は獨立の公許を得るに至つた。南山律は四分律を正依として、之を大乘的に解釋し、自宗を佛敎の正宗とし、又戒律を止持・作持の二門に分ち、止持門にては五戒・八戒・二百五十戒・三百四十戒を立て、

律宗を評す

作持門にては二十犍度の規定を守るべしと示してゐる。律宗の一斑は略して此の如きである。

さて略して律宗を批評するに、此の宗は大體小乘佛敎にして、殆ど取るに足らない、今且く五箇條を擧げて其の理由を說明する。一には律宗の所謂戒律なるものは、三千年の昔、佛が弟子達の不法行爲を矯正するために、時々規定したまうたる小乘的道德律に過ぎないので、時機を異にし國土を別にする現代の日本人などにとつては、不相應なる邊が尠くないからである。二には小乘律の流布して利益ある時代は、大集經の五個の五百歲中には、第一の五百歲間であり、正像末の三時中には正法千年の前期である、故に此の期間中に於ては歸依すべき價値があるけれども、今末法に於ては宗として信ずべき價値がないのである。三には彼の根本宗典なる八十誦律・四分律は、一向に小乘律なるに拘らず、後世の人師が漫に大乘の敎義を盜取して、自宗の醜面を覆はうとする不正行爲あるからである。四には小乘淺近の戒律に執じて、敢て大乘法華に敵し、且つ大乘非佛說の橫議さ

へ唱ふるが故である。五には宗教の生命たる本尊と信仰とに立脚せず、宗教としての價値がないからである。要するに此の宗は奈良朝佛教界に於ては、授戒得度の權利を有し、相當に勢力があつたといつても、遠くは傳教によつて征服せられ近くは日蓮聖人によつて解散の宣言を與へられ、六百年乃至一千年の久しい間、殆ど死滅した廢宗であつたのである。それが明治の聖代になつて甦つたのは、寧ろ日本佛教の大なる恥辱であるといはねばならぬ。若夫れ日蓮聖人の所謂四大格言中に、特に「律國賊」と折伏せられたる理由は、姑く後に讓ることにする。

第四項　法相宗

「法相宗」の名は、其の依經たる『解深密經』一切法相品によつたのである、又の名を唯識宗といふは、三界唯識を主張するからである。六經（華嚴經・解深密經・如來出現功德莊嚴經・阿毘達摩經・入楞伽經・厚嚴經）、十一論（瑜伽論・顯揚聖教論・大莊嚴論・分別瑜伽論・辨中邊論・二十唯識論・觀所緣緣論・集量論・十地論・乘論・阿毘達摩論）を所依とし、特に『解深密經』と世親の『唯識論』等を本經本論としてゐる。一代經を有（阿含經等）空（般若經等）中（深密經等）の三時とし、五位百法、賴耶緣起を說き、唯識中道の理を主張し、一乘方

便三乘眞實、五性各別を立つるのである。初め佛滅後、彌勒菩薩が中印度に降つて五部の論（瑜伽人師地論・分別瑜伽論・大莊嚴論・辨中邊論・金剛般若論）を說き、無着・世親が相續して敎義を發揮し護法・難陀等の十大論師が世親の『唯識論』を釋し盛に唯識の理を談じた、中につき護法を正義とする、護法の弟子戒賢が相續して、當時支那より渡天せる玄奘に傳へ、玄奘歸唐の後十大論師の釋を合揉して『成唯識論』を譯し、玄奘の弟子慈恩は之が『述記』及び『樞要』を作つて盛に本宗を弘めた。慈恩の弟子慧沼は『唯識了義燈』を作り、智周又慧沼を相承して『唯識演祕』を作つた、慈恩・慧沼・智周を支那法相宗の三祖とし、樞要・了義燈・演祕を合して『唯識三箇疏』と稱する。我が國にては白雉四年元興寺の道昭が入唐して玄奘に遭つて本宗を學び、歸朝の後元興寺に住して始めて本宗を弘めた（第一傳）、次で齊明帝の四年智通・智達の二師が入唐して玄奘に學び、歸朝の後之を弘めた（第二傳）後大寶三年智鳳・智鸞・智雄亦入唐し、智周に宗義を受け、歸朝の後之を弘めた（第三傳）、智鳳の弟子に義淵あり、義淵の上足玄肪、靈龜二年入唐して天平七年に歸朝し、興福寺に弘通した（第四傳）、後學者相繼

いで法燈を相傳へたのである。然し公認せられたる宗團としては、傳敎大師の宗敎統一以後久しく廢絕してゐたが、明治五年七月眞言宗の所轄となつた。然るに同十五年六月獨立の公許を得、興福寺・法隆寺を大本山となし、同二十五年六月更に藥師寺を加へて三本山とするに至つた。

法相宗は律宗等の小乘宗に比較すれば、大に進步せる大乘宗なれども、尙是れ權大乘中の初步であつて、吾人の依用するに足らない宗門である。今亦其の所以を辯ずるに略して五箇條を擧げる。一には其の本經たる『解深密經』の如きは、四十餘年未顯眞實と取消されたる權經に過ぎないからである。二には玄奘慈恩等の主張する一乘方便三乘眞實の敎義の如きは、『法華』の「十方佛土中唯有一乘法無二亦無三」の眞義を明白に破壞せる大謗法なるが故である。三には彼の五性各別の所立の如きは、隔歷不融の法義にして、慈恩の著『法華玄贊』に法華の二乘成佛は不定性の二乘にして、定性の二乘に關せずといへる如きは、還つて法華の心を殺すの大謬見なるが故である。四には敢て中道宗と名乘るも實は著有の偏見を出

でぬからである。五には敎相理論門の不徹底なるは且く措くとするも、觀心修行門の一向難道にして一般的にあらず、假ひ哲學宗としては秀でたりとするも、宗敎としては不成立なるが故である。要するに此の宗も彼の律宗と同じく、前に傳敎に破られ、後に日蓮に打たれ、宗敎としての生命は久しく斷絕し、僅に唯識學又は性相學として、各宗學校の一科に當てられたに過ぎなかつた、それが明治時代に來つて宗門として復活したのは、寧ろおこがましい事である。

第五項　華嚴宗

「華嚴宗」は『華嚴經』に依つて開かれたる宗なるが故に、斯く名くる。一代佛敎を五敎十宗に分類して『華嚴經』を最も勝れたるものとなし、十玄門六相圓融の敎義を以て法界緣起・事々無礙の宇宙觀を立て、吾人の一善一行は其の儘萬善萬行にして、一成一切成、一證一切證なりと論ずるのである。初め印度に於て天親菩薩『十地論』を作つて本經の一部を敷衍し。支那にては東晉安帝の時、覺賢三藏の『六十華嚴』を譯せし以來屢傳譯され、隋末の頃杜順によつて始めて一宗の綱紀

を立てた、後智儼を經て賢首に至り全く大成され、慧苑・澄觀・圭峯等相傳へた。本邦には天平八年唐僧道璿によつて傳來し、同十二年新羅僧・審祥が始めて東大寺に『華嚴經』を講せしより隆盛となり、良辨・實忠・等定・正進・相繼いで弘通した。後堀河帝の頃・高辨あり、後嵯峨天皇の頃、宗性・凝然あり、何れも本宗を興隆した。然し本邦に大に行はれたは僅に奈良朝時代に過ぎぬ、平安朝の始め傳敎の爲めに大打擊を被つた已來、宗敎としての存在は極めて微々たるもので、彼の法相宗等と共に一種の學問宗・哲學宗として相傳へられしに過ぎなかつた。明治十九年に至り東大寺を管長所在の地として獨立した。

華嚴宗は法相宗等に比較すれば、頗る高等なる佛敎であるが、我等は之を唯一佛敎として信賴するに足らない、今亦五箇條を擧げて其の所以を辯ずる。一には「佛の眞意を知らんと欲せば法華經を讀め、佛の富貴を知らんと欲せば華嚴經を讀め」ともいつて、其の根本聖典たる華嚴經は佛典中重要なる地位を占むるものだといつても、此の經は佛成道後試に開演したまうた大乘敎にして、正しく本懷を顯說したまへるものでないからである。二には此の經は「二乘は座に在りと雖も聾の如く啞の如し」とて、所化の敎益全からず、久遠實成顯れざるが故に、能化の實事極らず、能化の上にも所化の上にも大缺陷あるが故である。三には假ひ哲學的に高尙なる敎理を談ずるも、宗敎的に下機を救濟する道に乏しく、末法の宗敎として不適當なるが故である。四には彼宗の祖師の一人たる澄觀は『華嚴經』の「心如工畫師」の文に、『法華經』の一念三千の法門を盜み入れ、法盜罪を構成せるが故である。五には實際上宗敎としての感化力極めて小にして、人生を裨益すること尠きが故である。之を要するに此の宗は方便權敎に依れる權宗にして、既に業に平安朝の初め傳敎によつて葬られたる死佛敎である、それは全國中僅三十二箇の寺院しかないのを以ても證據立てられる、所詮此の宗は大乘佛敎學中の一科として、各宗の學校に研究せらるれば可なるべきもので、一般國民の宗敎と爲すに足らぬものである。

第六項　眞言宗

「眞言宗」は一切經中で唯『大日經』・『金剛頂經』等の祕密敎によつて開宗し、その眞言を主義とするが故に、眞言宗又は密敎といふのである。彼宗の相傳に云く初め龍猛（舊譯に）南天竺の鐵塔を開いて、金剛薩埵より親しく大日如來の說ける祕密敎を授り、之を龍智に傳へた。次に善無畏之を承けて唐の開元四年支那長安に來つて之を傳へ、金剛智亦更に之を承けて同八年高弟不空と共に支那洛陽に來つて之を傳へた。金剛智の死後、不空再び印度に行き、龍智に逢うて梵本の密敎を得、支那に來つて之を飜譯し、宗義を慧果に傳へた、之れより先き、大興善寺の一行は主として善無畏より密敎を相承し、台密の源頭をなした。日本の空海延曆二十三年入唐し、慧果に從つて金・胎兩部の奧義を授り、多くの密敎を齎し、弘仁七年高野山に金剛峯寺を建立して本宗を大成し、始めて眞言宗の名を立てた。空海は眞雅に傳へ、眞雅は源仁に傳ふ、源仁の弟子に益信・聖寶あり、數代の後・益信の末流は廣澤流となつて六派に岐れ、聖寶の後も亦小野流となつて、六派となつた。後・保延六年、覺鑁根來寺にあつて敎網を張り、後・賴瑜に至つて新義派

と稱し、高野山を古義派といつた。敎義は顯密二敎十住心を以て一代佛敎乃至一切思想界を批判し、金胎兩部の曼荼羅をたてゝ、宗義の奧義を開き、三密（身密・口密・意密）加持によつて吾人の三密と大日如來の三密と相應し、凡身に卽して佛身を成ずると說くのである。然るに別に『眞言律宗』なるものあつて、一時此宗に屬せしも、明治二十八年獨立するに至つた。（律宗の下參照）

此の宗は古來眞言祕密と稱して、佛敎各宗中優勝の地位を占むる觀あるも、實は佛敎の正義を誤り、吾人の信奉するに足らぬ宗敎である、其の理由を辯ずるに、亦略して五箇條を擧げる。一には其の顯密二敎判に於て、『大日經』等を以て獨り大日法身の說ける密敎とし、『法華經』等を以て釋迦應身の說ける顯敎とし勝劣取捨を論ずるは、一代聖敎に根據のない妄談であり、又その『十住心論』に於て眞言第一、華嚴第二、法華第三とし、所謂第三戲論法華の義の如きは、本師釋尊の法華第一の鳳詔を無視する大誑惑の說であり、總じて此の宗は敎判の正義を誤つてゐるのである。二には彼の本尊たる大日如來とは何物ぞ、大日の出世成道

利生は釋尊より前か後か、對機說法の佛は必ず八相成道す、父母は誰そ、其の出生地は何處ぞ、普く諸經を尋ねるに大日の八相成道を見ず、知るべし、此の佛は本師釋尊の梵音聲に顯はれたる「阿字本不生」の理法身佛に過ぎない、かくて此の佛は一種の理想佛に過ぎぬのに、敢て事相佛に爲すさへ誤解なるに、此の佛が大日經等を說けりなぞとは、以ての外のことである。三には天に二日無く國に二王なきが如く、一世界中二佛竝出の道理がない、而して主師親三德有緣の本尊佛は、唯我が釋尊なるに、彼の徒敢て釋尊を排して大日を以て本尊とする、豈に宗敎的大逆罪を構成するものではないか。四には眞言は設ひ其の哲理に於て高尙なりとするも、その三密の修行は、一般人の行法としては普遍的ならず、世界的宗敎として缺ぐるところがある。五には佛法上に於て、大日權敎を信じて法華實敎を捨て、釋迦正主を廢して大日他佛を立つるが如き、背正歸邪の謗法思想は、やがて王法上に於て、下剋上・危邦亡國の惡果を顯すの原因となるのである。以上略して五義を以て此宗を批判するに吾人の信ずるに足らぬ僞佛敎である。日連聖

人呵して「眞言亡國」と宣ふ。蓋し已むを得ない破言である。尙後節に辯ずる處がある。若し夫れ「眞言律宗」の如きは眞言に似て眞言にあらず、律宗に類して律宗にあらず、二途不攝の蝙蝠宗と評するより外はない。又別項を設けて批評する價値がない。

第七項　融通念佛宗

「融通念佛宗」は、人皇七十四代鳥羽天皇永久五年、良忍・彌陀直授の「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是名二他力往生一」なる四句偈に依つて開宗したと傳へらる。「華嚴經」「法華經」を正依の經とし、淨土三經を以て傍依の經とし、而して此等を釋するに華嚴・天台の章疏及び淨土の往生論等を以てしてゐる。此の宗の流義は、人々の念佛の融通を談じ、一人の稱名を以て衆人の功とし、衆人の念佛を以て一人の功とし、一人往生すれば衆人往生し一人成佛すれば衆人成佛すとなす、また心に日課稱名の事を誓ひて其の名簿に記名する、又入會の時に當つて自他の願行成就すと信ずるを安心となし、每朝盥嗽して西方に

向ひ、「彌陀所傳、融通念佛、億百萬遍、決定往生」と稱へて念佛十聲するを起行とする。本宗は良忍が京都に遊化してより以來、都鄙の間に盛に行はれたか、後衰頽し、七世・法明に至つて、再び祖道を振興した。其後三百四十餘年を經て第四十五世融觀に至り、三度本宗を興して法燈を掲げた。良忍・法明・融觀を三祖と稱し、大阪・大念佛寺を本山とする。

此宗は宗祖といひ宗義といひ、諸宗に比較して甚だ劣れる觀がある、亦且らく五箇條を擧げて批判する。一には立宗の根本義と稱する四句の偈文の如きは、只是れ諸法の融通を說けるに過ぎずして、立宗の本義としては殆ど無價値である。二には正依の經として『華嚴』『法華』を取るならば、自ら行の對象としては釋尊を本尊とし、行そのものとしては華嚴又は法華の行を取らねばならぬ筈なるに彷彿の經の南無阿彌陀佛を以て本尊とし信行とするは、敎行不對の大難がある。三には凡そ獨立せる宗門としては、必ず特得の敎判あるを要す、然るに此の宗には之れを缺いでゐる。四には凡そ立敎開宗てふ大事は、必ず大研究の結果でなく

てはならぬ、然るに此の宗は御夢想を以て其の根本義とした、豈に奇怪千萬の事では無いか。五には宗祖良忍の人格、一宗敎の祖師としては、その智慧に於て其の德に於て不十分である。以上五箇條を擧げて批判するに、此の宗の缺陷多きこと、は知るべきである。宜なる哉、大本山大念佛寺の如きも、既に頽廢の極に達し大阪に於ける一種の遊戯場たるの觀がある、又多く論ずるに足らぬ一小宗門である。

第八項　淨土宗

「淨土宗」は、聖道門の此土入聖の敎に對して往生淨土を期するが故に、此の名がある、法然を宗祖とする。一大藏經中特に『觀無量壽經』『無量壽經』『阿彌陀經』及び『往生淨土論』(天親)の三經一論を以て正依の經論とし、西方安養世界に於ける阿彌陀佛を選んで唯一本尊とし、南無阿彌陀佛の六字の名號を念唱して、死後淨土に往生するを目的とし、敎判としては難易二道・聖淨二門・正雜二行・自他二力等の廢立を用ゐ、難行道・聖道門・雜行の自力敎を捨てゝ、易行道・淨土門・正行

の他力教に歸するを主義とする。此の宗の起源は、支那魏の頃、四論宗に曇鸞なるものあり、天親の『淨土論』を漢譯せし菩提流支に會うて深く淨土に歸し『淨土論註』を著して、大に念佛を弘めたにある、次に道綽あり、但槃宗より轉じて曇鸞に相續し、隋末より唐朝に至つて此の宗を弘め、『安樂集』を作つた、續いて善導出で盛んに此宗を弘め、『觀經疏』を作り、支那淨土教を大成した、曇鸞・道綽・善導の三人を支那に於ける淨土三祖と稱する、善導の後に見るべき者は懷感・少康の二人であつた。日本に於ては後鳥羽院の御宇に源空法然あり、通じては支那三祖に相承し、別しては善導に相傳し、天台宗を脫して新に淨土宗を唱導した、建久九年九條兼實の請に應じて『選擇集』を著した、立宗の根本聖典である。法然門下中、聖光は鎭西流を開き、證空は西山善峰寺にあつて西山派の祖となり、隆寛は長樂寺流を開き、覺明は讃岐にあつて九品寺流を弘め、成覺は下總に赴いて一念義の祖となり、善信(親鸞)は別に淨土眞宗を起した。今の單稱淨土宗は卽ち鎭西流である、蓋し鎭西の稱は祖聖光一時九州に歸り、筑後に善導寺を立て、大に

淨土宗を評す

宗風を宣揚せるに由る。聖光の法嗣・良忠關東に遊化し、又京都に弘法した。門下六流に分る。關東の白旗・藤田・名越の三・京都の小幡・三條・一條の三が、これである、其の中白旗・名越の二流が最も榮えた。良忠の後にあつて法燈を續ける重なるものは、寂慧・定慧・良順・了專・幡隨・蓮勝・了實・了譽・西譽・存應・滿譽等である。本山は聖光の建てたる京都知恩院、良忠の立てたる鎌倉光明寺(西山)了譽の起した江戸傳通院、西譽の開いた同增上寺である、明治に至つて知恩院を總本山とし、別に增上寺、金戒光明寺、淸淨華院、百萬遍知恩寺を四大本山とし、一宗を統括するに至つた。

此の宗が人生の救濟に効果尠なき聖道自力教卽ち哲學的佛教に反對して、人生救濟に効果多き淨土他力教卽ち宗教的佛教を開創したる點は多とする所なれども一代佛教の正軌を亂し、唯一救主の選擇を誤り、あはれ釋迦の宗教をして基督教の後に瞠着せしめ、近世科學哲學の指笑する所とならしめたる罪は、看過すべからざる所である。今その罪狀を指摘するに、亦略して五點を擧げる。一には凡そ

佛教徒としては、其の應用的方面に於ては、外道の說も尙用ゐるべきものがあるけれどもその根本義としては必ず『法華經』に依るべきは論を待たぬ、然るに彼れ善導・法然等は方等淺劣の淨土三部を取つて諸經中王の法華妙典を捨てゝ顧ないで、全く權實の正軌を誤れるものである。二には佛教の唯一救主としては、娑婆教主三德有緣の釋迦牟尼佛を奉戴せねばならぬに、他方無緣の阿彌陀佛を崇拜するは、恰も國民が自國の王を擱いて他國の王に從ふが如き逆非である。三には最高の太陽でなくば最低の地を照すに足らぬが如く、末法下劣の機根を救ふには必ず最勝の教を選擇せねばならぬのである、然るに低級淨土の三部を以て、敢て末法下劣の衆生を救はうとする機法の關係を知らないものである。四には設ひ彌陀念佛の一行が、末法の下機に適する易修易行なりとするも、その所期はたゞ是れ未來の往生に過ぎず、我が法華の一念信心現世成佛のそれに比して大に徑庭がある、況んや其の易修易行をたゞ權教の題目たる南無阿彌陀佛のみに觀て、實教の題目たる南無妙法蓮華經に觀ないのは、迂愚の極といはねばならぬ。五には彼宗

の消極的の厭世主義・未來主義は結局積極的・人生主義・國家主義・世界主義の大潮流に逆行するものにして、到底今後の社會を指導するに堪えないのである。されば設ひ其の興學布教等の人力を借つて、一時宗團の隆盛を來すことがあつても、其の不完全なる宗教は、眞に國家人生を利導するに足らず、還つて人類をして、生ては國家の罪人たらしめ、死しては地獄に墮らしむる邪法であるといはねばならぬ。日蓮聖人をして「念佛無間」の破斥を爲さしむる、蓋し大に所以あるのである。

第九項　眞宗

「眞宗」具には淨土眞宗といひ、親鸞の開創する所である、彼の淨土宗の未だ彌陀の本意を顯さず、淨土教の眞髓を明さざるに擇んで斯く名くる。親鸞は元法然の門下にして、元仁元年正月常陸稻田に於て『教行信證文類』六卷を作る、これ實に一宗開闢の始めである。二雙四重の教判を立てゝ自宗を以て最勝とした。先づ淨土宗との相違を辯せば、淨土三部の中心を定むるに彼れは『觀無量壽經』を以て

し、此れは『無量壽經』を以てする(是一)。又本尊形式を定むるに、彼れは彌陀一尊に附するに觀音勢至の二菩薩を以てし、此れは唯彌陀一尊を以てする(是二)。又信心を定むるに、彼れは純他力ならざるに對して、此れは純他力を主張する(是三)。又往生を論ずるに、彼れは未來往生を正意とするに對して、此れは現世往生を正意とする(是四)。又念佛を定義するに、彼れは念佛卽ち信心とするも、此れは念佛は信心にあらず報恩なりとする(是五)。又彼れは出家佛法を守り僧侶に戒を持たしめ斷淫禁肉せしむ、此れは新に在家佛法を開き、僧侶も無戒にして肉食妻帶せしむ(是六)。又彼れは普通の法脈相續に依り、此れは新に血統相續を始む(是七)。要するに此の宗は信心爲本を標して外儀の賢善を衒はず、肉食妻帶の宗風を立て　專ら在家往生の門を開く。その稱名念佛を勸むるは報恩謝德の行業にして、信者が生涯の稼業も亦感謝の念より勵むに外ならずとする。法脈は龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源空・源信(法然)とて、之を三國七祖とする。親鸞京都に本願寺を建て、一宗の根本道場とした、第八代蓮如あり大に一宗を興隆した。德川の初め本願寺は東西に分れ、

更に分裂して現今の十派に及んだ、但し宗義は大體同致である。俗に門徒宗、一向宗と呼んだが、明治五年三月朝許を得て眞宗と公稱した。

此の宗は絕對他力を主張し、所謂淨土敎の最高頂點に達したるものに相違ないが、大體立宗の根本が權經に依れるが故に、吾人は之を信奉するに足らない。今亦略して五點を擧げて評破する。一には元來釋尊の宗敎は、一向他力宗にもあらず、又一向自力宗にもあらず、自他不二の妙力宗である、故に此の宗が設ひ他力宗として發達の極地にあるものとするも、何等の價値がないのみならず、還て圓滿なる釋尊の宗敎をして、偏他力の邪宗に陷らしむるものである、世人をして佛敎は賴他的奴隷的宗敎なりとの冷評を爲さしむるは、主として此の宗の罪ではないか。二には本尊問題上、一向に彌陀一佛を偏崇して諸佛諸神を排斥するは、唯一神敎の弊害に墮せるもので、天照太神を根本國神とする日本の國民思想にも大衝突するもので、少くとも日本國民の信奉すべからざる宗敎といはねばならぬ。三には其の極端なる信心萬能諸行無用の主義は、到底社會の道德及び智能を積極

的に開發するに足らない。四には十劫正覺の彌陀を以て敢て久遠實成阿彌陀佛と揚言す、これ彼れが依經の淨土三部に全く根據無き親鸞の臆說に過ぎぬ、蓋し法華壽量品の本佛を竊取したものではないか。五には肉食妻帶の新義は時代の要求として可なりとするも、惜いかな彼れが依經に其の根據なきを如何せんやである（僧侶肉食妻帶の根據は、一切經中たゞ法華經の分別功德品に限る）其の他の雜點は概ね前の淨土宗評破の下の如くである

此の宗は今や勢力に於ては、佛敎各宗中の第一位を占むる觀あるも、非眞理なる宗敎は、遂に沒落の運命に向ひつゝあるので、到底今後永く人類の歸依を持つに足らないのである。

第十項　禪宗

「禪宗」は戒・定・慧三學中にも特に禪定を本位とするが故に名く、又『大梵天王問佛決疑經』に出づる釋尊の拈華微笑を基とし、「以心傳心、不立文字、直指人心見性成佛」とて、經論に依らず本尊を立てず、直に佛の心を衆生に傳ふるを以て主義とするが故に、佛心宗ともいふ。初め釋尊其の佛心を大迦葉に傳へ、付法藏

二十四祖相承し、婆舍斯多・不如密多・般若多維を經て、第二十八祖菩提達磨に至る。達磨は正しく此の宗の祖にして、梁武帝の時之を支那に傳へ、慧可・僧璨・道信・弘忍の下に法融・弘忍あり、弘忍は正系を受け、法融別に牛頭禪の一派を開いた、弘忍の下慧能は南宗を開き、神宗は北宗を開く。慧能の下また青原と南嶽との二派となつた。青原の後系に曹洞宗出で（洞山の良价等を鼻祖とす）、南嶽の後系に臨濟（臨濟の義玄等を鼻祖とす）潙仰・宗門・法眼・黃龍・楊枝の六宗が分れた。日本へは文德の御宇に、支那の義空禪師渡來して傳へたが法嗣を得なかつた。建久二年榮西、臨濟宗を將來り、安貞二年道元曹洞宗を將來つてより、漸く弘通し、鎌倉時代最も隆盛を極め、鎌倉に五山、京都に十刹の大寺競ひ興り、宗風全國に振ふに至つた、後戰國時代に及んでは、五山の禪僧專ら文敎の維持に努めた。降て江戸時代に入り承應三年明の僧隱元來朝して臨濟の一派を傳へ、後黃檗宗と稱した、之より臨濟曹洞・黃檗の三宗並び行はれた。

此の宗は「以心傳心不立文字」等といへば、非常に高尙なるに似たれども、實に

は宗教の正路を逸し、觀心に偏したる宗旨であつて、中正を得たる眞佛教とはいへない。今亦略して五點を擧げて評破する。一には其の立宗の本典ともいはるゝ『問佛決疑經』に於て大悟徹底せりと稱する第一祖迦葉は、『法華經』に來りて今昔の領解卽ち昔權今實の所以を佛前に告白し、佛は之を認可し、光明如來の記莂を與へられてゐる、知るべし『決疑經』に於ける其れは眞實にあらざることを、況んや『決疑經』は眞僞未決なるに於てをやである。二には佛教の心髓、釋尊の悟は一往不可說なるも、尙可說する所がなくば、衆生何に依つて眞理を求めやうや、佛は其の不可說なる佛法を『法華』に於て說明せられてゐる。然るに達磨の徒たゞ不可說方面のみを見て可說方面を顧ず、敢て經を離れて意を探らうとする、恰も鑛山を離れて金銀を求めやうとし、猿を離れて膽を獲やうとするが如き愚である佛『涅槃經』に戒めて曰く、「經を離れて佛法を求むるものは、魔の眷屬なり」と、日蓮聖人の「禪天魔」の破言、良に所以あるかなである。三には凡そ宗教の二大要素は本尊と信仰とである、然るに此宗は端的座禪をこれ事とし、一種の哲學宗に

墮して宗教の體を爲さないのである。四には極端なる謂己均佛の思想は、「未得謂得、未證謂證……增上慢比丘、將墜於大坑」(方便品)のものにあらずして何ぞ、其の弊の極する所、丹霞をして佛像を焚いて暖を取らしむるに至る、豈可なりといふべけんやである。五には設ひ其の座禪觀心の主義たるや、或は少數の上根者には有益なりとするも、多數の下根者には無益なることは覆ふべからざる事實である此等多くの缺陷ある禪宗は、到底釈迦の正宗と稱することは出來ないのである。日蓮聖人の特に之を折伏したまふ、決して無理ではない。

第十一項、時宗

「時宗」とは『阿彌陀經』等の「臨命終時」の文により、平生時を臨終と心得て念佛する宗意を表して宗名としたので、淨土教の一派である。建治元年一遍熊野權現に詣で、「六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一念證、入中上々妙好華」の一頌を授り、自ら名を一遍と改め(初め智眞)遂に此宗を開いた。本宗の特色は、熊野權現の神勅を開宗の根據とすること、全國に遊行して彌陀念佛を勸進賦算

時宗を評す

するを以て、宗主の行實となす制規あることゝ、淨土三部中殊に『阿彌陀經』を主とし、法華・華嚴總て念佛を說く諸經を所依の經とすること等の點にある。一遍沒後第二世・他阿・宗規を完成し、第七世・託阿大に宗義を揚ぐ、其著『器朴論』は要書である第十一世尊觀親王入住するや、勢力漸く强くなつた、後十二の分派を生じた。但現今は廢派し、相模・藤澤・淸淨光寺を總本山としてゐる。

此の宗も亦吾人の信を捧ぐるに足らない、略して三點を擧げて評する。一には苟くも佛敎の一新派を創設するに當り、一熊野權現の神勅に托す、何たる不見識ぞや、知るべし、此の宗は開宗の出發點に於て、既に業に可ならざることを。二には其の主義とする平生念佛の如き、別に珍とするに足らない。三には其の三個の特色の如き、別に特色として數ふる程のものにあらず。要するにこの宗は淨土敎中の一小派に過ぎない、彼の淨土宗、眞宗の巨大なる猶信賴するに足らず、況んや此の一小宗に於てをや、深く評論するに足らない。

第十二項　天台宗

以上で爾前權敎に依つて開宗した律宗より時宗に至る十宗の一斑及び批評を畢へた、所で殘つてゐるのは、法華實敎に依れる天台宗の一である。此の宗は特に日蓮聖人の佛敎と直接の關係あれば、少しく詳論せねばならぬ。

「天台宗」は天台大師を宗祖とする宗旨なるが故に、斯く名くる、若し所弘の法に約すれば、須く法華宗といふべきである。支那南北朝の時北齊に慧文あり、印度龍樹の『智度論』の「三智一心中得」の文、『中觀論』の「因緣所レ生法、我說二卽是空一、亦名爲二假名一、亦是中道義」等の文に依つて、一心三觀の旨を悟り、之を南岳の慧思に傳へ、慧思亦之を智顗天台師へ傳へた。智顗天台師更に法華の妙典を硏鑽して深く釋迦出世の本懷を悟り、法華を以て一代の指歸、萬〻の極宗と定めた、時に年三十である、『法華玄義』『法華文句』『摩訶止觀』の三大部三十卷は實に敎觀雙美の妙說にして、弟子章安の筆受に成る。章安より智威・慧威・玄朗と次第し、玄朗之を荊溪の湛然(妙樂と號す)に傳へた、湛然『玄義』に『釋籤』・『文句』に『記』・『止觀』に『弘決』各〻十卷を作つて、大に天台の敎義を布演し、華嚴の澄

觀等の破天台に對しては、『金鍔論』を作つて之を駁した。日本に於ては最澄傳敎、延曆年間入唐して湛然の高弟道邃・行滿二師に相承し之を叡山に弘めた。然るに前述の如く天台傳敎の正流は僅に第一座主義眞に限られ、第二座主圓澄に至つては中半眞言に化し、第三座主慈覺及び智證に至つては、殆ど眞言に如同した、更に安然に至つて禪宗に傾き、降つて慧心に至つて念佛に墮落した、斯て所謂日本天台なるものは、法華中心の正系より脫線し、權實雜亂の佛敎と變形し、以て今日に到つた。天台に始まり傳敎に大成した天台法華宗は、叡山を中心として一時日本佛敎を統一した程盛大であつたが、中古已降漸く衰頽の氣運に傾いた、總本山は比叡山延曆寺である。（別に智證を派祖とせる寺門派に於ては園城寺を、眞盛を祖とせる眞盛派にては西敎寺を本山としてゐる）然るに正系的宗義の大要を一言せば、敎門には五時八敎を以て一代佛敎を縱橫に判釋し法華を以て純圓一實の本敎とし諸法實相論を以て敎理とし、觀門には一心三觀十乘觀法を立て、卽身成佛娑婆卽寂光の大事を說く、此の敎觀雙美の天台法華宗は實に佛敎各宗中の一大壯觀を爲してゐる。但慈覺・安然・慧心等によつて眞言・禪・念佛に雜

亂したる所謂日本中古天台の宗義の如きは、今且く之を措く、

天台宗は前の十宗には似ず、日蓮聖人の宗敎に接近せる宗なれば、吾人は特に此の宗に對しては、入念の批判を加へねばならぬ。

さて天台・傳敎の法華宗たるや、日蓮聖人の法華宗と俱に本師釋尊の正宗たる『法華經』を時代に應用し祖述したるもので、兩祖が內心に於て、果た其の化導の或點に於て共通點尠からぬといつても、嚴密に兩者の內容形式を比較研究するに大に異なる所がある。今略して十異を擧げる、一には先づ其の人格を論ずれば、彼れは迹化藥王の再誕、此れは本化上行の化身で、人格に高下の相違がある。二には其の依經を論せば、彼れは迹門爲正、此れは本門爲正で、依經に淺深の相違がある。三には其の本尊を論ずれば、彼れは諸法實相の一理又は法華經一部又は釋尊又は藥師如來又は彌陀、此れは南無妙法蓮華經十界勸請の大曼荼羅で、本尊に純雜の相違がある。四には其の修行を論ずれば、彼れは理の一念三千・一心三觀・十乘觀法・二十五方便、此れは事の一念三千・信心唱題で、修行難易の相

違がある。五には彼れの宗格は哲學的、此れの法華は宗教的で、宗格に理事の相違がある。六には彼れの教相は在世正意、此れの教相は滅後正意で、教相に新舊の相違がある。七には彼れの宗風は支那風、此れの宗風は日本風で、宗風に親疎の相違がある。八には彼れの教判は不徹底、此れの教判は徹底で教判に徹不徹の相違がある。九には彼れの傳道は經文の豫言に冥合せず、此れの傳道は經文の豫言に冥合し、傳道に合不合の相違がある。十には彼れの宗教は像法過時の死佛教此れは末法應時の活佛教で、宗教に死活の相違がある。略して十異を擧げて比較するに台日兩宗の相違粗知るべきである。日蓮聖人曰く、

問て云く天眞獨朗の法(天台宗の法義)滅後に於て何時流布せしむるか、答て云く像法に於て弘通すべき也……所詮末法に入ては天眞獨朗の法門無益なり……末法に入て天眞獨朗の法を弘めて正行を爲さんものは必ず無間大城に墮つべし。(十八圓滿抄)

等と、由是觀之、天台の宗教は設ひ過去の時代には利益があつても、今の時代には何等の効果がないのみならず、還て無益有害の邪法と謂はねばならぬ。正系

天台にして既に然り、況んや慈覺・安然・慧心等によつて權實雜亂に墮せる、所謂中古日本天台に於てをや、吾人は大に皷を鳴して其の非を糺彈せねばならない。

又日蓮聖人曰く、

天台の學者慈覺より已來、玄(法華玄義)文(法華文句)止(摩訶止觀)の三大部の文をとかく料簡し義理をかまふとも、去年の暦、昨日の食の如し、末法の初め五百年に、法華經の題目をはなれて成佛ありといふ人は、佛說なりとも用ふべからず、何に況んや人師の義をや。(上野殿御書)

設ひ天台・傳教の如く法のまゝなりとも、今末法に至ては去年の暦の如し。何に況んや慈覺より已來、大小權實に迷て大謗法に同じきをや、然る間像法の時の利益も無之、まして末法に於てをや。(觀心本尊得意抄)

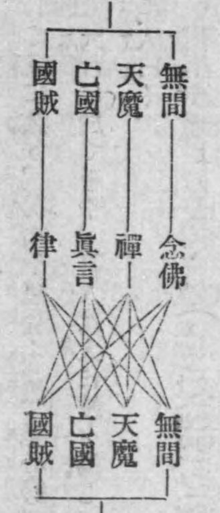
等と聖語深く思ふべきである。要之、日蓮聖人の宗教は第二義以下の點に於ては、天台・傳教の教を應用し利用したまへる所尠からぬといつても、其の第一義に至つては所謂本化獨步にして、全然天台宗と立脚地を異にするのである。

況んや誤られたる邪系天台に於てをやである。然るに古來一流の曲學者あり、日蓮は天台の復興者のみ、日蓮の法華は天台法華の變形に過ぎず、日蓮の學說は中古日本天台の亞流を出でずと、蓋し方外の妄評である。今委しく評破するに遑がない。

四個格言

第十三項　四大格言に就て

茲に佛敎各宗批評の筆を投じやうとして、日蓮聖人の敎義中一異彩を放てる四大格言に就いて一言する。四大格言又は四箇格言・四箇名言等ともいふ、「念佛無間」「禪天魔」「眞言亡國」「律國賊」がこれである。この格言は大聖人が本師釋尊の使命を奉じて佛敎革命の大事を果すべく諸宗に對つて放たれたる大破壞の聲である。



四大破言の通別

(乙)の如くこの四大格言は互に通ずれども、姑く其の主張する所に敵對して、(甲)の如く正反對の破言を用ゐたまへるのである。則ち念佛宗は念佛往生を主唱して、法華卽成の妙義を無視するが故に、墮落無間の破言を用ゐ、禪宗は謂己均佛を骨張して、釋迦の聖敎を蔑如するが故に、天魔外道の破言を用ゐ。眞言宗は鎭護國家を誇揚して、法華經王の妙義を度外するが故に、亡國邪法の破言を用ゐ律宗は戒律國寶を標榜して、一乘法華の國土を侵害するが故に、國賊惡敎の破言を用ゐたまうたのである。

特に四宗を破する所以歷史的理由

然るに此の四宗を特に破したまうた理由に二あり、一には歷史的理由、二には敎理的理由である。初めに歷史的理由をいはゞ、印度の佛敎は支那に傳り、支那の佛敎は日本に集る、而して日本の佛敎を時代より見て大別すれば、第一期奈良朝の佛敎、第二期平安朝の佛敎、第三期鎌倉の佛敎となる。所で「念佛無間」・「禪天魔」は鎌倉佛敎に對する代表的折伏である、鎌倉佛敎としては、法然の念佛宗と榮西・道元の禪宗が最も盛大であつたからである。「眞言亡國」は平安朝佛敎に

對する代表的折伏である、平安朝佛敎としては天台宗があるが、此れは或は取るべく、或は捨つべきで、一向に排斥すべきでないからである。「律國賊」は奈良朝佛敎に對する代表的折伏である、然るに此には二の理由がある、一には此の時代の華嚴・法相・三論・倶舍・成實・律の六宗の中で、他の五宗は殆ど廢頽し、律宗のみが後世に遺つて、鎌倉時代に及んでも極樂寺良觀の如き律僧が上下を風靡して居たが故である。二には奈良朝時代に六宗は分れてあつても、其の僧は大概律宗に傳ふる所の四分律に依つて得度受戒したもので、律宗を離れては僧籍に入ることができなかつた樣である、故に一面からいへば、華嚴等の他の五宗も皆律僧であつたからである。此の二の理由があるから、奈良朝佛敎六宗の代表的折伏に、特に律宗を選ばれたのである。然るに若し新舊兩思想より觀察すれば、「念佛無間」「禪天魔」は鎌倉佛敎の新思想に對する打破であり、「眞言亡國」「律國賊」は奈良・平安佛敎の舊思想に對する折伏であるともいへる、正しからざるもの不合理なるものは、其の新と舊とを問はず、近きと遠きとを論せず、擊退すべき必要があ

敎理的理由

るからである。

次に敎理に就いていへば、若し大小權實に約すれば、前三は權實相對の折伏であり、後の一は大小相對の折伏である。若し敎觀二門に約すれば、第一は偏敎無觀を破したるもの、第二は偏觀無敎を破したるもの、第三・第四は邪敎相を破したるものである。又若し三祕に對せば、「念佛無間」「禪天魔」は本門題目を明にするため、「眞言亡國」は本門本尊を顯すため、「律國賊」は本門戒壇を立てるためである。更に一說あり、「無間」は成佛に對し、「天魔」は佛に對し、「亡國」は安國に對し、「國賊」は國師に對したるものと。又若し總別破立をいはゞ、宗旨の三祕は別立にして四箇格言は別破、而して格言の語尾に付する「諸宗無得道、墮地獄之根源」とは總破にして、「法華獨一之成佛」とは總立であるともいへる。

小結

之を要するに四大格言は、一往は別して四宗を折伏したものであるか、再往は日本乃至世界に於ける邪系的佛敎を總破したものである。更に再々往の廣義に解すれば、啻に佛敎內に於ける邪敎義惡思想を打破するに止らず、普く一切世間に

於ける邪思想惡敎學を打破したものといはれる。卽ち「念佛無間」論は、一切世間に於ける背本思想・卑屈心・厭世主義・未來主義・消極主義・迷信妄想等を擊退したものであり。「禪天魔」論は、亦一切世間に於ける內觀過重の精神主義・惡平等・惡自由・我慢放逸の邪謂惡作等に對つて大鐵槌を下したものであり。「眞言亡國」論は、亦一切世間に於ける誑惑思想・反逆思想・危險思想・不正祕密敎學等を打破したものであり。「律國賊」論は、亦一切世間に於ける時代不適當の律法・有名無實の道德・不正妄惡の思想等を停止する爲の折伏である。斯くて此の四大格言は、單に佛敎の革新を叫ばれたるにあらず、又啻に日蓮聖人以前の敎學を成敗せられたるに止らず、橫は廣く世界の思想界に對する大破立であり、竪は天下後世の敎界に對する大批判である、豈に萬世不磨の敎訓ではないか、稱して格言といふ、良に所以あるかなである。

第十章　結論

「日蓮聖人の敎義」は、要するに南無妙法蓮華經の一大祕法を以て宗旨とし主義とし生命とする。而して其の敎義を分解すれば、五綱と三祕とである。五綱は卽ち本化敎相門であつて、三祕は卽ち本化觀心門である。まさに此書を畢らんとして更に其の大要を述べる。

初めに「本化敎相門の五綱」とは卽ち敎・機・時・國・序をいふのである。佛敎乃至一切世間の敎學を比較研究して、其の精要たる一乘妙法蓮華經を詮顯するは第一の敎綱である。之に內外・大小・權實・本迹・敎觀といふ五重の敎相がある。世界の敎學中、外道卽ち他敎を捨てゝ內道卽ち佛敎を取るは、第一內外相對であり。更に佛敎中、小乘を捨てゝ大乘を取るは、第二大小相對であり。更に大乘敎中、爾前權敎を捨てゝ法華實敎を取るは、第三權實相對であり。更に法華實敎中、迹門を捨てゝ本門を取るは、第四本迹相對であり。更に本門中、敎文を捨てゝ敎心を

取るは、第五教觀相對である。而して最後第五重の教相に於て詮じ出されたる法華本門肝心の大法とは何であるか、卽ち妙法蓮華經の一大祕法であつて、實に釋迦牟尼の本懷、一大佛教の心髓でありとするは、これ教綱の大旨である。次に衆生の機根を鑑知して、適當なる教法を選擇するが第二の機綱で、卽ち佛在世及び正法像法の機は本已有善なれば之れに應ずる教法は大小權實等の諸教で可なるも今末法の機は本未有善なれば、之れに應ずる教法は法華本門肝心の妙法蓮華經でなければならぬとするは、これ機綱の大旨である。次に時代の大勢を觀察して、適當なる教法を選定するが、第三の時綱で、卽ち正像二千年の時代は稍清善の時なれば、之れに被らする教法は大小權實等の諸教にて可なるも、今末法の時代は濁惡の世なれば、之れに投ずる教法は法華本門肝心の妙法蓮華經でなければならぬとするは、これ時綱の大旨である。次に國家の狀態を洞見して適當なる教法を選出するが、第四の國綱で、卽ち外國は姑く措き、我が日本國は大乘佛教、殊に法華經の國であり、特に現代の國家には法華本門肝心の妙法蓮華經でなければな

らぬとするは、これ國綱の大旨である。次に宗教進化の過程を考察して、適當なる教法を選定するが、第五の序綱で、卽ち大小權實等の諸宗競ひ起りたる後は、必ず法華本門肝心の妙法蓮華經を弘めねばならぬとするは、これ序綱の大旨である之を要するに、教を明し、機を鑑み、時を察し、國を知り、序を考へ、畢に以て、一大祕法の妙法蓮華經を詮顯するは、これ五綱の大趣意である、五綱を以て本化教相門とする所以實に茲にある。而して此の五綱の教相を以て普く世界の教學界を批判するに、佛教以外の諸宗教及び哲學等は固より外道異學に攝し、佛教各宗中にも律宗・法相宗・華嚴宗・眞言宗・融通念佛宗・淨土宗・禪宗・眞宗・時宗等は、小乘・權大乘に屬し、天台の一宗は迹門法華又は權實雜亂に墮し、皆吾人の歸宗とするに足らない、所謂「諸宗無得道墮地獄の根源・法華獨一の成佛」とは、蓋し我が本化教相門の結論である。而して此の教相研究の歸結である、一大祕法の妙法蓮華經は、實に天地の眞理・法界の神靈であつて、若し其の破邪的破壞面を論ずれば、苟くも此の妙法蓮華經に反對する人法は、總て之を打破して悉く其の存在

を許さないのであるが、若し其の顯正的包容面を言はゞ、此の妙法蓮華經の中には、能く一切の人法を攝取し建立し復活して、一も遺す所なく漏す所がないのである。

後に「本化觀心門の三祕」とは、即ち本門の本尊・本門の題目・本門の戒壇をいふのである。吾人が觀心修行の精要たる信心の對境は、第一の本門の本尊であつて即ち南無妙法蓮華經・十界勸請の大曼荼羅である、南無妙法蓮華經は其の中心總體であり、十界勸請の諸尊は其の別體各面であり、而して其の主體は久遠實成の釋迦牟尼佛であり、其の能顯の大導師たる日蓮大聖人は、特に我等の親しき模範的大人格者である。次に吾人が觀心修行の精要たる信心そのものは、第二の本門の題目であつて、即ち南無妙法蓮華經の受持・信心・口唱・實行これである、讀誦・解說・書寫・供養・乃至・三學・六度・諸善萬行、悉く皆此の中に含有し統一せらるゝのである。後に吾人が觀心修行の精要たる信心本尊の律法・場所並に理想所期は、第三の本門の戒壇であつて、即ち是名持戒・即是道場、王佛冥合・皆歸

妙法、事壇建立・世界統一これである。斯くて本尊は所觀の妙境であり、題目は能觀の妙智であり、戒壇は境智冥合の所である。又本尊は一念三千の妙體であり題目は一念三千の妙用であり、戒壇は一念三千の妙相である。而して此の三祕の本體は皆南無妙法蓮華經の一祕である、一祕を開けば三祕、三祕を合すれば一祕三祕と一祕は畢竟開合總別の相違に過ぎないのである。之を要するに、此の一祕即ち三祕の南無妙法蓮華經は、實に人類の總歸・萬國の極宗であつて、我等苟くも此の南無妙法蓮華經の本尊に對して、至誠强盛の信心を致し、此れに一如し此れに合體せんと努力するときは、自然に凡身に即して佛身を成じ、任運に娑婆に即して寂光を實現すること、疑なしである。これ三祕の歸着點である、三祕を以て本化觀心門とする所以實に茲にある。「日蓮聖人の敎義」の大要略して此の如きである。

願くは萬國の王民、五綱の敎相に依つて最勝の智眼を開き、三祕の觀心に依つて最善の修養を爲し、總じて南無妙法蓮華經の宗敎に歸命すれば、必ずや人生究

竟の目的を成就し、國家最高の理想を實現し、世界最勝の文明を光顯すること斷じて疑を容れない所である。南無妙法蓮華經。

通俗日蓮聖人の教義 終

通俗日蓮聖人教義の著者

北尾日大師の著書目錄

●新選日蓮宗綱要　菊版一冊　賣切

●日蓮聖人の宗教　菊版一冊　正價八拾錢　小包八錢

●新日蓮宗綱要　四六、版　全一冊　正價四拾五錢　郵稅四錢

●法華經主義　四六版　全一冊　正價拾錢　郵稅錢

大正八年二月十日印刷
大正八年二月十五日發行

正價壹圓五拾錢

著作者　北尾啓玉
京都市上京區東洞院通三條上ル

發行兼印刷者　井上治作
京都市上京區東洞院通三條上ル

印刷所　平樂寺印刷部
京都市上京區東洞院通三條上ル

發行所　平樂寺書店
京都市東洞院通三條上ル
振替大阪一三〇六五番
電話上三九七三番

不許複製

日蓮宗大學教授　磯野本精師著

日蓮宗教義大意

菊版クロス上製
金文字入
全一冊

正價金壹圓　郵税金八錢

著者が多年教授の實驗に依り『日蓮宗大學豫科教科用書』として著述せられたる者
本宗宗學研究者の好伴侶たり。（全文總振かな付）

同師著

日蓮宗史要

菊版全一冊
正價金八拾錢
郵税金八錢

京都市東洞院三條上ル　村上平樂寺　振替大阪一三〇六五番

□普及的廉價な經典□

法華經普及會虔修

縮刷 法華經 幷開結

（四號活字訓點付）

洋裝菊版半截クロス表裝金文字入頗美本

全一冊　正價金六拾錢　小句料金八錢

法華經は天地法界の祕藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛敎觀の實歸、思想統一の最高指針なり、現代思想界の紛亂其極に達し、結歸する處を知らざるに當りては、須らく法華經の研鑽を奬勵せざるべからず、然るに世間流布の經典其類多しと雖ども、或は其價貴く、或は携帶に不便に、或は文字細微に過ぐる等、求道の士をして滿足せしむるものなし、仍つて此等の不利不便を除き、菊半截版として携帶に便にし、且其價を廉にし、以て汎く一般に供給し、本經の普及を圖らんとす。

京都市東洞院三條上ル　村上平樂寺　振替大阪一三〇六五番

□尤も完全せる訓譯法華經□

法華經普及會虔修

訓譯 法華經 幷開結

（五號活字總かな付）

全一冊

正價金六拾錢　小包料八錢

洋裝菊版半截クロス表裝金文字入頗美本

本書は法華經及開結の一部十卷を本宗に於て尤も完全せる訓點として廣く依用せらるゝ頂妙寺版訓點に依り完全なる訓譯を施し正確なる總振かなを附し尙附錄には「科文」及「字解」を添へ、如何なる階級程度の人にも容易に之を讀誦し領得し得らるゝやう努めたり、日蓮宗當用としては善美を極めたる最も完全にして尤も實用的なる經典なり。

京都市東洞院三條上ル　村上平樂寺　振替大阪一三〇六五番

宗祖傳記中の最大權威

小川泰堂居士著

菊版半截全一冊

縮刷 **日蓮大士眞實傳**（繪入）

上製布製金文字入
正價金七拾錢
並製石版刷美表紙
正價金卅五錢
郵稅各六錢

本書は故小川泰堂居士苦心の大著にして、事實の正確なる、文章の平易明快なる、挿畫の精巧なる、他に比する物なく御傳記中の權威として尤も多く用ゐらる、從來縮刷刊行せる物數種ありと雖も、印刷製本共に粗惡にして原本の眞價を損うこと夥し、弊店此を遺憾とし今回製版に意を用ひ、殊に挿畫は寫眞凸版を以て原本の儘を縮圖して讀者に提供す。

日蓮大聖人の人格を知らんとする者、日蓮主義を研究せんとする人は先づ本書を一讀せらるべし。

京都三條市東洞院上ル　平樂寺書店　振替大阪一三〇六五番

妙宗布教文庫

第一編 修養講話

林鳳宣師著

現代人心の趣く處、凡ての社會を通じて漸く宗教的修養の必要を感ずるに至り、道を求むるの士、日を追て益々多くなる教界の前途これより將に多事ならんとす。唯だ憾むらくは優良なる布教師は常に其人に乏しくして到底限りなき求道者の需に應ずる能はざる事即ち是なり、是に於てか此急需に應ずるの一策として教界の諸名士を煩はして其高説を筆受し、之を編纂して「妙宗布教文庫」と題し弘く一般の求道者に流布せんとす。

〔三編以下續々發刊〕

三六版頒美本
全一冊紙數百四十頁
正價金貳拾錢
郵稅金四錢

第二編 現代と日蓮聖人教義

小林一郎先生講演

今や世界を通じ大戰亂の時に際し國際的生存競爭益々激しからんとす、吾人は如何なる覺悟を以て此の激浪大波と奮鬪すべきか須からく大なる自覺と大なる信仰を要す、日蓮聖人の教義が如何に現代に適切なるか本書は通俗明晰に解決せし先生が講説なり。

三六版頒美本
全一冊紙數百八十頁
正價金貳拾錢
郵稅金四錢

京都三條市東洞院上ル　平樂寺書店　振替大阪一三〇六五番

妙宗家庭讀本

磯村野風先生著

第一編 法華利生 一 妙麿

第二編 至孝第一 日朗上人

第三編 法華行者 加藤清正

四六版表紙
石版五度色刷
頗美本四號活字
總振かな

各冊 正價金貳拾五錢
送料金四錢

由來日蓮宗門の著述は概ね難解にして、やゝもすれば婦女子に疎ぜらるゝの風あるは遺憾なり、弊店茲に磯村野風先生に請ひ君が得意の平易明麗の筆を以て春の花の如く秋の紅葉の如き美くしき、宗門六百餘年間法華經の信仰に活ける、人々の事蹟を順次に紹介し一般家庭の讀本として諸賢母の前に捧げ精神修養の伴侶たらしめんとす。

第一編「一妙麿」は宗祖が御遺文中に記し給へる法華利生の美しき孝子物語なり。

第二編「日朗上人」は熱烈なる信仰に活ける師孝第一の殉教の物語一讀血走肉躍る。

第三編「加藤清正」鬼と云はれし清正が裏面の優美なる信仰的生活の內面を描きしもの。

京都三條市東洞院東上ル　平樂寺書店　振替大阪一三〇六五番

朝夕拜讀の御妙判

權僧正 林鳳宣師著 （三號活字印刷鮮明）

妙行日課

上等日本紙刷半紙形 和裝頗美本

金一冊 正價金七拾五錢 郵稅金八錢

編者は現代宗門に於ける布教界の泰斗なり本書は編者多年の經驗により編纂せられたる物にして吾人が日課として毎日拜讀すべく一ヶ月三十一日間宗門の聖日國家の祭日等に關し尙信仰及道德に關する諸種の題目を設け其題下に適切なる御遺文數章づゝを載せたり一般信者は朝夕此書を拜讀して健全なる信仰を養ふを得べく布教家は布教壇上豐富なる讃題を供給せらるべし布教用として勤經用として極めて必要なる良書なり

京都三條市東洞院東上ル　村上平樂寺　振替大阪一三〇六五番

携帶用小形經典

頂妙寺版訓點附活版縮刷

縮刷 妙法蓮華經

開結附 三卷

黃鳥ノ子紙金襴仕立 特製金五圓五拾錢
同 上製金四圓八拾錢 純子仕立
小包送料金拾貳錢

縮刷 法華經要品

一卷

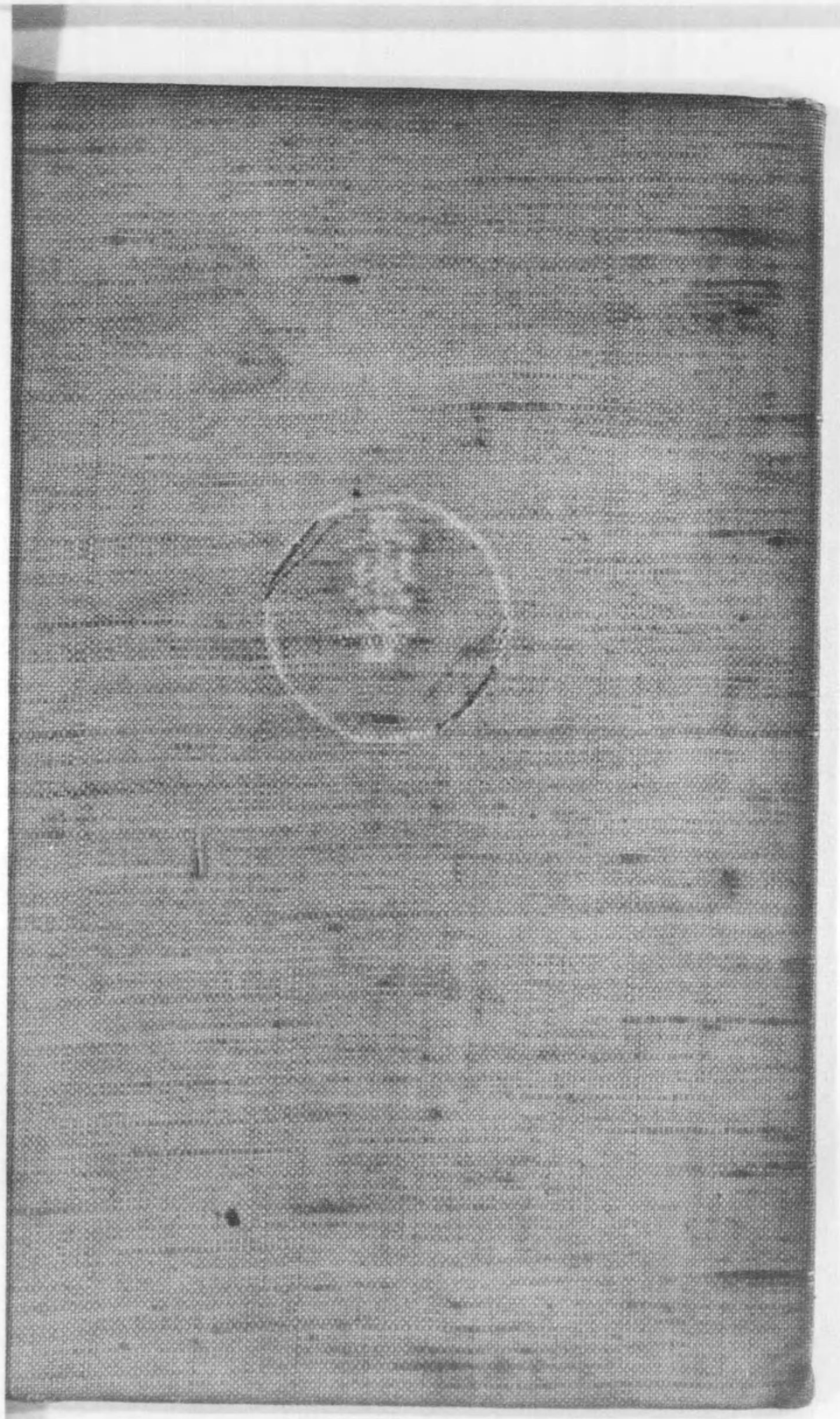
黃鳥ノ子紙金襴仕立 上製金貳圓
同 純子仕立
並製金八拾五錢
郵稅各四錢

妙法蓮華經は佛教教義の帝王なり、亞細亞文明の樞軸なり、苟も佛教を知らんとならば須く先づ法華經に來るべし、百年大藏に沒頭せんよりは一日法華を研鑽するに若かざるなり。

從來刊行のものは形ち大にして携帶に不便少なからず、本書は寸法天地四寸五分、巾二寸二分と云ふ頗る小格好なるが故に、布教用は勿論、頂戴經、備經等に尤も適當なり、殊に文字訓點共に鮮明、表裝又頗る美にして四方に金箔を施し其威嚴犯すべからざる他に類なし。

京都市三條東洞院上ル 村上平樂寺 振替大阪一三〇五六番

325
338

325
338

終